



首里の「まち」に光をあてる

首里まちづくり研究会は、那覇市首里地区のコミュニティの活性化や首里文化の啓蒙、首里地区の経済と文化発展推進を図ることを目的として平成17年に設立され、平成19年にNPO法人の認証を受けた地元有志の集まりである。ハードとソフト両面にわたる活動を通して、首里城周辺エリアに残る繁栄の名残や、伝承されてきた生活文化にも光をあて、首里城だけでなく、首里地区全体の魅力を住民と来訪客が共に楽しむようなまちづくりを目指している。主な活動として、①平成10年に120年ぶりに復活した首里城お水取り行事への支援、首里地区の自治会の活動や歴史文化の紹介、②首里かわらばんの編集発行、観光客と地域とのふれあいと楽しい回遊を図る施設も設置、③首里城下の遊覧説明板整備事業、④首里城下のまちめぐるマップ編集発行、⑤金城町石畳道地区の遊覧説明板整備事業を行ってきた。また、平成22年から電動アシスト自転車をレンタルする、⑥首里を回遊型の観光拠点にする事業に取り組んでいる。



山城 岩夫氏(やましるいわお)

昭和28年、沖縄県国頭村生まれ。NPO法人首里まちづくり研究会事務局長。造園デザイナーとして東京で活動していたところ、昭和63年に首里城復元プロジェクトのメンバーにと声がかかり、沖縄に戻る。これをきっかけに、首里のまちづくり活動に取り組むようになる。

取組主体 NPO 法人 首里まちづくり研究会 (<http://happy.ap.teacup.com/suimachi/>)

設立年 平成19年(2007年)7月

住所 沖縄県那覇市首里鳥掘1-50-1

電話 098-963-9294

FAX 098-963-9296

地域の課題

まちのハード整備事業に地域の意向を加えたい

ハードの復元だけでなく、ソフトの面でも沖縄らしさを甦らせたい

ソリューション

まちづくり活動組織「首里まちづくり研究会」の結成【首里地区住民と来訪客が共に楽しむまちづくり】

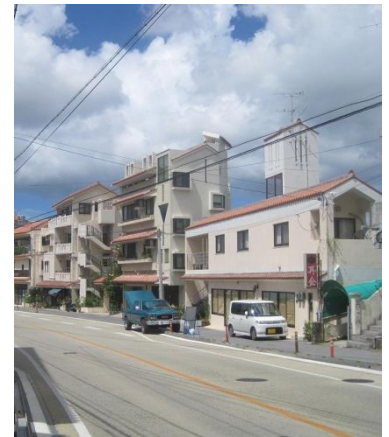
琉球王国伝統行事「首里城お水取り行事」の継承運営と見学会の催行【住民組織による観光まちづくり】

(地域の特徴)

まちづくりに向けて仲間たちが集う

首里は、「尚巴志」が首里城を王城として1429年に琉球王国を統一して以降の450年もの間、高級官吏の住む琉球王国の首都「首里親国」として栄えていたまちである。沖縄戦により首里城を始めとした数々の旧国宝が破壊され、伝統文化や芸能の継承も危惧されたが、首里城の復元など、往年の沖縄らしさを甦らせつつあるところである。

そのような状況下、昭和60年頃には首里城下の「龍潭通り」の道路拡張や電柱の地中化、建物の高さ制限などを行い、古都に見合ったまち並みをつくらうという動きが、沖縄県建築士会首里支部のメンバーを中心とした「まちづくり龍潭会」で進められていた。一方、昭和61年には首里城復元プロジェクトが開始され、そのメンバーの一人として沖縄に戻った山城氏は、地元の仲間たちと首里のまちづくりについて語り合っていた。まちづくり龍潭会は、ハード事業に地元の意向を加えなかった。そこに山城氏らのグループが繋がった。まちづくり龍潭会は地域一帯化、伝統文化の継承や観光・イベント開催などへの活動領域の拡大を目指し、賛同する地域住民の参画を募り、平成17年12月に「首里まちづくり研究会」として再出発することとなった。



かつて琉球王国の首都として栄えた龍潭通り



首里城お水取り行事の様子、多くの観光客が訪れている

首里城お水取り行事をよみがえらせよう

首里城が復元されることとなったが、ハードだけでなくソフトの面でも昔の首里を再現したい。その象徴的事業として地元有志などが創意工夫を重ね、平成10年に120年ぶりに「首里城お水取り行事」は復活を果たした。これは、琉球王国時代、年始儀式に使用するため本島最北端の辺戸村の川へ王府より使いを派遣、取水し首里城へ献上していた行事である。地域の少子高齢化や過疎化が進み継続困難な状況の中、研究会はこの行事の運営に協力し、平成18年からは首里の当蔵町自治会とともに配役・スタッフの派遣、バスツアーの運営、首里城への献上行事の運営支援を行っている。



首里城お水取りバスツアーの募集パンフレット

地域の課題

地域の人たちに首里の「まち」のことをもっと注目してほしい

首里城の周辺エリアの魅力を伝え、住民、来訪客が楽しんで巡るまちにしたい

ソリューション

→ 首里地区の自治会の活動などを紹介したフリーペーパーの編集と発行【首里かわらばん】

→ 首里城下の「遊覧説明板」の整備、観光客に対する情報発信の充実【「まちめぐるマップ」の編集発行】

(地域資源の発掘と活用術①)

首里の「まち」をもっと知ろう

復元された首里城は平成4年から一部供用開始となった。首里城こそ、観光対象の中心には違いないが、首里城の周囲にはかつての繁栄の名残り、今の生活文化など魅力に溢れている。

観光客にもっと首里の「まち」を知ってもらいたい。首里城公園と周辺地域とが連携することが重要だ。そのために住民がもっと地域のことを知るべきだと考えた研究会は、地域の魅力を再発見できる地域情報紙「首里かわらばん」の製作に取り組んだ。

首里地域で活躍している人やグループにスポットを当て、地域の取り組み、人々の活動を取り上げ、首里の魅力である地域資源（史跡、自然景観、伝統芸能、生活文化、行事・イベントなど）を併せて紹介する。毎号発行部数1万、現在まで22号発行、地域を知る教材としても活用されている。



「首里かわらばん vol.22」この号では末吉町の魅力の特集

(地域資源の発掘と活用術②)

首里の「まち」をもっと伝えたい

龍潭通りは首里のシンボルロードとして新しく生まれ変わろうとしている。一方、首里城への中心アプローチであるモノレール駅から龍潭通りまでの間にも見どころはあるのだが十分に伝え切れていない。

地域住民と地域への訪問者が見物し、巡って楽しめるまちづくりの推進を図りたい。そこで研究会は那覇市との協働で、このエリアにある自治会管理地や私有地に、歩行者を対象とした歴史資源や亜熱帯植物などの説明板を40基設置した。説明板は4カ国語表記である。

さらにこの説明板の紹介に併せて、散策の楽しみの増大を目指して、地域の祭り・名所・名店などの情報を含めた総合マップを作成し、モノレール駅やホテルなどで配布している。



まち歩きイベント「首里ウォーク」には外国人も参加



「首里城下まちめぐるマップ」には地図、名所や名店が詳しく掲載

首里を回遊型の観光拠点に～「ポタリング」事業開始

(地域資源を観光事業に活かすまでのプロセス)

年間約 240 万人の観光客が首里城を中心に来域しているが、観光バス、レンタカーによる周遊観光が中心であり、周辺地域を巡る観光客は限られていた。首里周辺における観光客の滞留時間の延長、地域内消費の活性化、環境に配慮した観光の実現、外国人観光客の受入推進を進めたいものの、首里城周辺地域は、狭い路地や坂道が多く観光客が訪問しにくいところである。文化財や景勝地、昔ながらの施設・史跡が点在しているものの、駐車スペースが少なく、立ち寄りの困難な箇所が多いという課題もある。

その対策として、平成 22 年 5 月から那覇市受託事業の電動アシスト自転車のレンタル事業をスタートした。モノレール首里駅前に「e レンタルサイクルポタリング首里」拠点ステーションを構え、観光客はそこで自転車を借りて首里のまちを回遊する。旅行プランとのセット販売などにより貸し出し量と認知の拡大を図るために株式会社 JTB 沖縄とも連携した。今後は、利用者の利便性とサービスの充実を推進し、満足度の高い首里観光を目指すこと、そして歴史と文化の薫る古都首里を自転車で回遊しふれあえる風景創りを目指している。平成 24 年度からは研究会の自主事業として取り組む予定である。(ポタる・ポタリングとは「ぶらぶらする」や「自転車に乗ってぶらぶらする」を意味する和製英語である)



モノレール首里駅前の「e レンタルサイクルポタリング首里」



旅行会社との連携により修学旅行でも利用されている

(統計データ)

数字でみる「首里まちづくり研究会」

ポタリング事業では、利用者に対してアンケート調査を実施している。その結果によると、年齢別では 20 代、30 代の若者だけではなく、年配層にも活用されている。

また、ポタリングの情報入手先については「モノレールの駅」が半数近くを占める。貸し出しの利便性に対する評価であろう。

